

論文の内容の要旨

論文提出者氏名	福 嶋 敏 郎
論文審査担当者	主 査 本 田 孝 行 副 査 伊 藤 研 一・野 見 山 哲 生
論文題目	Clinical outcomes in patients with small cell lung cancer in a single institute: comparative analysis of radiographic screening with symptom-prompted patients (当施設における小細胞肺癌患者の臨床的特徴 ー画像検査発見例と有症状発見例の比較検討ー)
(論文の内容の要旨)	
【背景と目的】 小細胞肺癌は、進展が速く遠隔転移をきたしやすいため、自覚症状での発見例が多く早期発見例は少ない。そのため、定期検診の有効性は乏しいと言われている。最近無作為化比較試験で、CT 検診の肺癌死亡率減少への有用性が報告されたが、その有用性は腺癌に高いとされ、小細胞肺癌における検診の意義は依然として不明である。本研究では、当施設にて入院治療を行った小細胞肺癌症例を、発見動機別に後方視的にその臨床的特徴と予後を解析した。	
【方法】 2000 年から 2011 年の間に当施設で治療された小細胞肺癌患者を対象とした。対象者を発見動機別に、自覚症状なしで CT 撮影 (CT 群) か胸部 X 線 (X 線群) で発見された患者、自覚症状で発見された患者 (症状群) の 3 群に分類し、それぞれの臨床的特徴や予後を後方視的に解析した。生存分析は Kaplan-Meier 法で行った。	
【結果】 CT 群 24 例、X 線群 37 例、症状群 86 例の合計 147 例 (男性 127 例、女性 20 例、平均年齢 68.1 歳) であった。3 群間で性別、年齢、Performance status(PS)の分布はほぼ同様であった。TNM 分類に基づく病期別では、症状群に比し、CT 群および X 線群で、病期 I、II の早期病期の症例が多く認められる傾向にはあったが、統計学的に有意な分布の偏りは認められなかった。しかし、小細胞肺癌の臨床的病期分類の限局型と進展型で分類すると、CT 群および X 線群は症状群に比し早期である限局型の頻度は有意に高かった。小細胞肺癌の中でもより早期で見つかった場合の手術施行例は、症状群と比較し、CT 群で有意に多く認められた。生存期間中央値は、CT 群 17.0 ヶ月、X 線群 19.0 ヶ月、症状群 12.0 ヶ月であった。 CT 群および X 線群の生存期間は、症状群に比し統計学的に有意に延長していることが示された。したがって、CT ないしは X 線を含む胸部画像検査で発見された小細胞肺癌患者は、症状で発見された患者よりも明らかに長期生存期間を示すことが示唆された。しかしながら、CT 群と X 線群の生存期間には、統計学的有意差は認められなかった。また、限局型と進展型、手術治療の有無、PS 0-1 と 2 以上、年齢 74 歳以下と 75 歳以上および性別で生存期間の比較解析を行ったところ、限局型、手術施行例、PS 0-1 群、74 歳以下の群のほうが統計学的有意差をもって生存期間の延長が認められた。しかし性別では生存期間に有意な差を認めなかった。	
【結語】 CT および X 線を含む胸部画像検査は、小細胞肺癌患者のより早期病期の発見に有用で、より良い予後に寄与する可能性が示唆された。しかしながら、胸部 CT 検査の胸部 X 線検査に対する有用性は認められなかった。	